

## 海外研修で学んだこと

薬学部 5 年

今回の海外実習に参加しようとした理由としては、アメリカの薬学教育や医療制度の違い等について大学の講義で学んだ際に、とても興味があったためである。

薬学教育では日本よりも進歩したカリキュラムであること、医療制度では日本には国民皆保険があることとは異なり、保険制度が根本から異なること、薬剤師として行うことができる業務の違いなど、日本との違いにとっても衝撃を受けたことを覚えている。

今回の海外実習の話をついた際に、アメリカの医療事情を現地で学びたいと感じたため、参加を希望した。

今回私は 2019 年 9 月 1 日から 9 月 15 日の期間、アメリカ合衆国・フロリダ州にあるノバ・サウスイースタン大学薬学部での海外薬学実習に参加した。

実習では、大学の講義への参加、薬局や病院、MTM Call Center、ICUBA Care と言った施設の見学と言ったことを行った。

それぞれで日本とアメリカの違いを実感することができた。

日本の講義は、CBT・国家試験のための講義であることが多いと感じている。しかし、アメリカの講義は、臨床を見据えた実践的な内容で、ガイドラインを中心とした内容の講義であった。講義だけではなく、薬剤師としての能力を高めるための授業として“Pharmacy Skills”があった。この授業では、課題として出された症例に対して分けられたグループ内で話し合い、代表者 1 名と生徒から選ばれた患者役がやり取りを行うことで患者対応について学ぶという授業である。授業終了後にやり取りの内容を SOAP 形式でまとめ、個人で提出をする。この際にも自分がまとめた内容とガイドラインと照らし合わせて、適切であるかを確認していた。どの講義でもかならずと言っていいほど、ガイドラインの内容を理解している必要があった。

日本でガイドラインを使用して授業を行うことは少ないため、この違いが印象的であった。

薬局や病院の形態の違いも印象的で、特に(1)製剤の違い、(2)クリニカルルーム、(3)ワーファリンクリニックといったことが印象に残った。

製剤の違いとしては、取り扱う薬剤は同じでも包装が異なっていた。日本では、SP 包装や PTP 包装といった形で 1 錠ずつ包装されている。しかし、アメリカではボトルに入れて患者さんにお渡しをしていた。日本でもボトルの薬剤はあるが、一方化調剤でのみの使用となっているため、とても驚いた。逆にアメリカには一方化調剤という概念がないことも、初めて知ることができた。

アメリカでは、薬局製剤でカプセル剤を製造することも印象的であった。製造するための装置も整備されており、日本に整備されている機械との違いも感じることもできた。

クリニカルルームは個室となっており、患者さんのプライバシーの保護の役割を担っていた。日本ではパーテーションでのみ仕切られており、この点も大きな違いであった。この部屋で服薬指導を行うだけでなく、血液検査や骨密度測定、栄養指導を行なっていることも教えていただいた。

ワーファリンクリニックでは、医師との契約によりプロトコルを作成し、血液検査で計測したPT/INRの数値より投与量を決定すると言った取り組みを行なっている。

これらの違いが日本の薬局と大きく異なる点であると感じた。

今回見学させていただいた病院は、精神科病院であった。私は病院実務実習で精神科病院の星ヶ丘病院で1週間実習をさせていただいたため、違いを意識するように心がけた。薬剤部の違いとしては、施設の規模や薬剤師の人数、取り扱う薬剤として精神科系の治療薬が多いこと等の類似していた点も多かったが、完全に同じということにはなかった。特に印象的であったのが、建物の構造であった。自殺防止の構造で突起が少ない構造が取り入れられていた点は同じであったが、飛び降り自殺ができないように1階建てで鉄格子がないと言った構造である点が異なっていた。星ヶ丘病院では、3階建てで窓に鉄格子が設置されていた。広大な土地を持つアメリカではならでの構造であるのではないかと考えた。日本では閉鎖的な環境であるが、アメリカでは開放的な構造であったところがとても印象深かった。

MTM Call Centerでは患者さんに対して電話をかけ、アドヒアランスの確認や等を行い、ICUBA Careでは患者さんからの治療における相談を電話の受け付け等を行っていた。

アメリカには日本のような国民皆保険により医療費の負担額の軽減がされるわけではないため、民間の保険に加入する必要がある。そのため病院に受診をすると自己負担額が増加してしまう。そのため、アメリカ国民はすぐに病院を受診するのではなく、まずは薬局に来局することが多い。このことから、患者さんからの薬剤師の信頼度高さや薬剤師の地位の高さが、日本よりも高いことを実感することができた。

ここで挙げたこと以外にも学んだことは多数あるが、「アメリカでは、薬剤師が医師よりも身近で、すぐに頼ることができる存在であること」、「求められる知識の幅が広く、そのための教育も充実していること」、「日本の薬剤師より行える業務の幅が広いこと」そして「これらのことからアメリカの薬学生は意識が高く、誇りを持って勉学に励んでいること」と言ったことを学ぶことができた。

今回の実習で日本との違いを学ぶことができた。実際にアメリカの薬学生の教育環境を見て、日本の薬学生は全体的に臨床的な知識が少ないのではないかと感じた。実際に私は実務実習で臨床的な内容を聞かれた際に、答えることができなかった。もう少し早い段階でガイドラインを使用する機会があれば、実務実習だけではなく、国家試験の勉強にも活かせることができるのではないかと考える。今の日本のカリキュラムでは、ガイドラインを使用して授業を行うことは難しいと思われる。しかし、日本の代表的な8疾患に関しては

特にガイドラインに触れる機会が欲しいと感じた。

アメリカと日本の医療制度の違いも学び、日本の国民皆保険の有難さを実感することができた。国民が平等に医療を受けることができる国は少なく、日本がどれだけ恵まれた環境であるかも実感した。現在日本の医療費は増加し続けている（厚生労働省，2019）。今の薬剤師が医療費の削減のためにできることを具体的に挙げることはまだできないが、これから徐々に見つけていきたいと感じた。

今回学んだことを、これからの勉強への意欲や薬学生としての経験として大切にしたい。